

## NEXT CONCERTS

>> 次回東京定期演奏会

### 第784回東京定期演奏会

2026年 10月16日(金) 19:00開演  
10月17日(土) 14:00開演  
サントリーホール

プレトーク 山田 和樹氏 金曜日/18:30~  
土曜日/13:20~

#### ■1回券料金

S ¥10,000 A ¥8,500 B ¥7,500 C 売完 P ¥5,000 Ys (25歳以下) ¥2,500

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

助成:



文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))  
独立行政法人日本芸術文化振興会

### 緊張と静寂をはらむスリリングな音楽体験

間宮芳生:

#### 二重合奏協奏曲

\* 日本フィル・シリーズ第16作

バルトーク:

#### ヴァイオリン協奏曲 第2番 BB117

チャイコフスキー:

#### 交響曲第6番《悲愴》 口短調 op.74



指揮: 山田 和樹



ヴァイオリン: ヴィルデ・フラング

### 次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

山田 和樹編

きき手 澤谷 夏樹

2012年から10年にわたり日本フィルハーモニー交響楽団正指揮者の座にあった山田和樹が、古楽の70周年を寿ぐ。指揮者は、楽団史を記念するにふさわしい演目・出演者を準備している。一方で、そのプログラムにこれまでの指揮者人生を色濃く反映させもする。つまりこの演奏会は、公なる日本フィル史と私なる山田和樹史とが交わったところに据えられていることになる。

楽団の歴史を語る上で省くことのできない事績に「日本フィル・シリーズ」がある。同団草創期の1958年から綿々と続く新作委嘱の営みだ。このたびは、その第16弾にあたる間宮芳生の《二重合奏協奏曲》(1966年)を再演する。

「高校生のとき、吹奏楽コンクールの課題曲の作者として間宮先生の名前を知りました。先生は、僕が音楽監督を務める東京混声合唱団ともゆかりの深い方ですが、僕が東混で手がけた間宮作品はほんの少し。

やがて日本フィルで先生のヴァイオリン協奏曲を演奏することになり、初めて間宮先生にお目にかかりました。相談にうかがうと『他の作品もありますよ』と楽譜や本をどんどんプレゼントしてくださる。『それではこれらの作品もぜひ』と申し上げましたが、残念ながら先生は2024年にお亡くなりになりました。

今回は先生が動き盛りのころに書いた作品に取り組みます。中身は現代風ですが、器は脈々と受け継がれてきた伝統的なスタイル。その発想が面白い。なにより、そこには間宮先生独特のエネルギーが詰まっています。そのパワーには圧倒されますね。

その点で、伝統的なスタイルの中に、その当時の新しい音楽を盛り込んだバルトークのヴァイオリン協奏曲第2番も間宮作品と呼応する。

「70周年をお祝いするにふさわしいソリストとして、僕がいつも共演候補の筆頭に名前をあげるヴィルデ・フラングにオファーをかけました。とにかく忙しい人なので捕まらないかもと思っていたら『オーケーです!』との応え。『それでは好きな曲を』と伝えたら、フラングがバルトークを挙げました。これはやはりすごいことです。あの人、普通には弾きませんからね。没入型。だけど奇を衒っていない。それなのに独特のアプローチ。いつもこちらの想像を上回ってきます。別世界を見せてくれる存在ですね。

日本フィル、チャイコフスキーとくれば、そこには長い演奏伝統がある。

「実は日本フィルとチャイコフスキー作品をほとんど演奏していないんです。第4番をいちどだけですね。チャイコフスキーは、僕の師・小林研一郎先生の十八番、代名詞。『先生の目の黒いうちは国内でチャイコフスキーを演らない』というのが僕の原則です。だからこそ70周年を機に、日本フィルで《悲愴》を振るというのは、一見ふつうの演目に見えますが、僕にとってはとても意義のあることです。

それから、もうひとつ伏線があります。疫病禍で3~4ヶ月、家にこもっていた時期、オーケストラのスコアをまったく開きませんでした。1ページも目にしなかった。ただ不思議なもので、毎日、頭の中に自動的にかかる音楽がある。それが《悲愴》でした。それで『この疫病がおさまったら、すぐにこの曲を演奏しよう』と心に決めたんです。ですが当時、舞台上もソーシャルディスタンスのご時世で、大編成の曲はそうそうできない。ただ思いは持ち続けて。それが、日本フィル、70周年、東京定期、小林先生のレパートリーなどと結びつき、特別な意味合いを帯びました」。

上記の通り日本フィル史と山田和樹史とが、間宮、フラング、小林といった個性的な音楽家を媒介に交わっている。その描線は思いのほか太い。その、墨をたっぷり含んだ筆づかいを、サントリーホールで確かめたい。